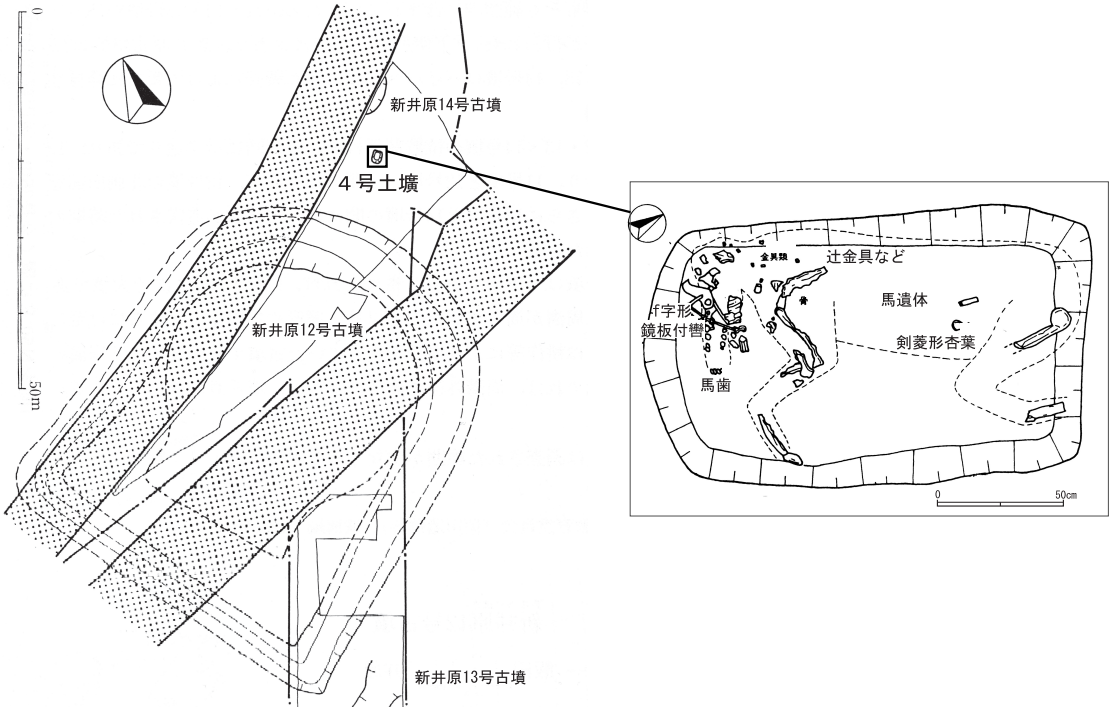
３．東日本における馬匹生産の開始

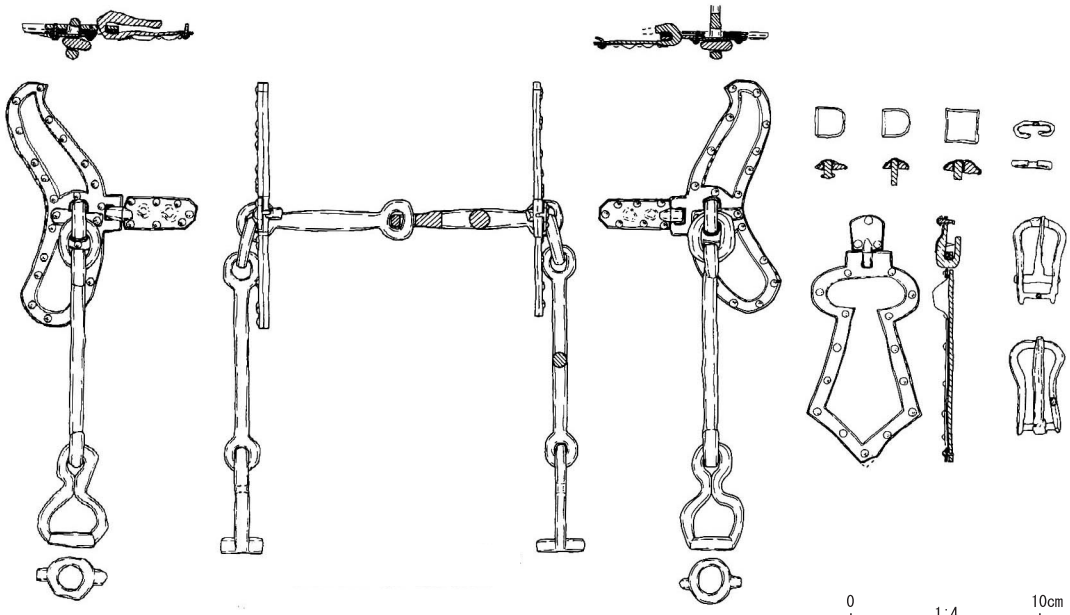
ａ．伊那谷

蔀屋北遺跡での馬匹生産開始から程なく、一部を除けば古墳の築造が希薄で、弥生時代以来の伝統的な小型低方墳による墓制を維持していた長野県南部の飯田市を中心としたいわゆる伊那谷において、突如として円墳を主体とした古墳群が形成され始めると、その後、５世紀後半頃からは前方後円墳が全国的に見ても異例といえるほどの高い密度で本格的に築造されるようになった。これらの造墓活動と併行して、伊那谷では馬の犠牲と見られる遺構や馬具が数多く確認できるようになることから、その背景には馬匹生産があったと一般に理解されている。代表的な事例を挙げると、飯田市物見塚古墳や高岡４号古墳では５世紀前半から中頃と見られる鑣轡が出土しており、また、５世紀中頃と推定される新井原・高岡古墳群４号土壙では金銅装ｆ字形鏡板付轡と金銅装剣菱形杏葉を中心とした豪華な馬装の馬が埋められていたことが確認されている。それぞれの馬具や遺構の詳細については既に小林正春氏や澁谷恵美子氏らを中心に飯田市教育委員会や多くの研究者によってまとめられているため、ここでその一々には触れず、今回は伊那谷の馬具の「埋納方法」の特徴についての概要を述べる。（小林・澁谷2007、澁谷2012）。注目すべき大きな特徴としては、５世紀段階の伊那谷では基本的に古墳主体部から馬具が出土することなく、ほとんどが古墳周溝や古墳の周辺に掘られた土壙からの事例であり、しかも多くが馬歯・骨をともなうという点が挙げられる。特に注意すべきことは、古墳周溝や古墳周溝に掘られた土坑から出土する場合、前方後円墳から出土した事例は現在までに確認されていないという点である。このことについて澁谷恵美子氏は「馬の埋葬行為は特定首長というよりも、馬匹生産に直接関わる集団による儀礼とみることができる（小林・澁谷2007、澁谷2012）」という重要な指摘をしている。伊那谷において前方後円墳主体部への馬具副葬が明瞭に確認できるようになるのは横穴式石室が導入されて以降のことであり、６世紀を前後する頃に築造された前方後円墳である北本城古墳例をその代表として挙げることができる。このことから、澁谷氏の指摘に従えば５世紀後半には「馬匹生産集団全体の共有財産」であった馬や馬具が、６世紀を前後する頃には「特定個人あるいは被葬者の近親者の所有物」へと変化したことが窺われる。さらには前方後円墳の副葬品となっていることから、馬匹生産集団の伊那谷における社会的状況の変化を読み取ることができる（堀2013）。どの程度の割合が特定個人やその近親者の所有物となったかは不明ではあるが、６世紀初頭の古墳から読み取ることができる変化は決して小さなものではなかったであろう。なお、北本城古墳は全長約24m と小型であり、５世紀後半に築造され豊富な武具が出土した推定全長約45.7m の溝口の塚古墳や、６世紀前半に築造され北本城古墳と同じく横穴式石室に馬具を副葬する全長約72.3m の高岡１号古墳とは古墳の規模に顕著な差が見られる。このことから、６世紀初頭の北本城古墳の頃に社会的状況が変化し始め、６世紀前半の高岡１号古墳の頃には有力者の古墳副葬品に馬具が含まれることが一般化したと見られる。

５世紀以前には少数の事例を除いてほとんど前方後円墳や大型古墳が築かれることが無く、在地の伝統的な文化の中で営まれてきた地域に突如として前方後円墳が多数築かれ、馬匹生産が行

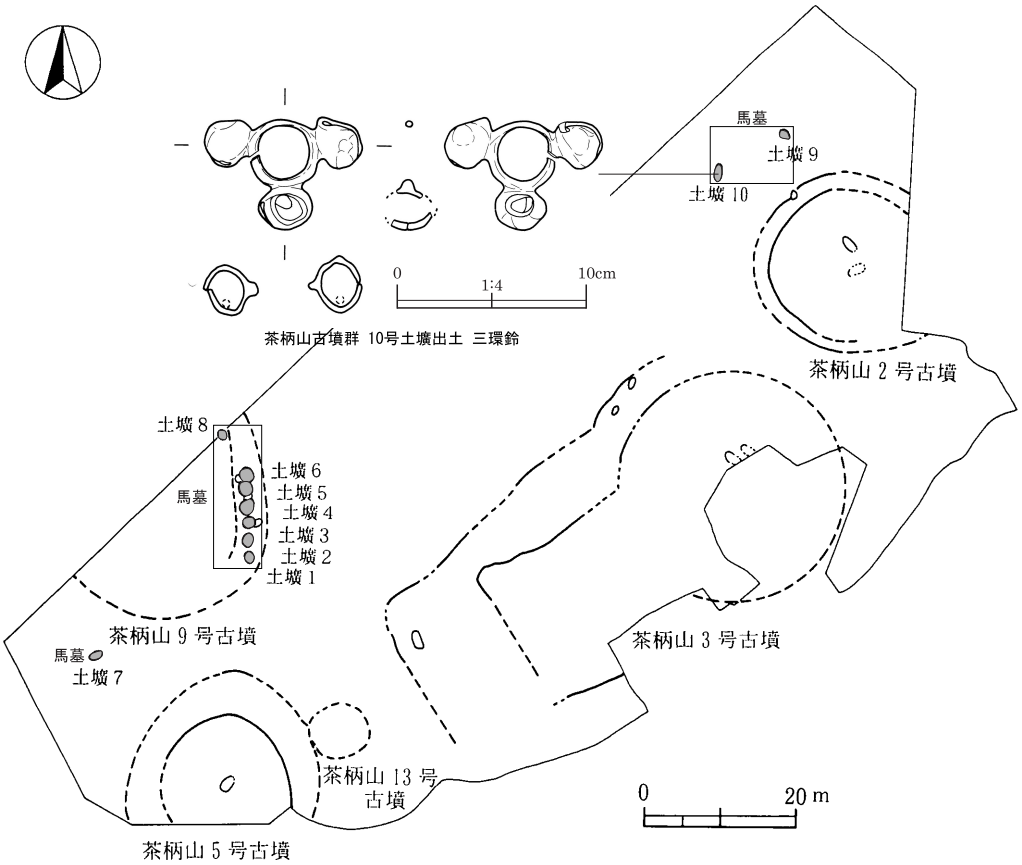


新井原・高岡古墳群4号土壙 馬具・馬遺体出土状況（下伊那史教育会1991より引用・加工して使用）



新井原・高岡古墳群4号土壙 馬具（長野県史刊行会1988より引用・加工して使用）

第７図　新井原・高岡４号土壙遺物出土状況および出土馬具



第８図　茶柄山古墳群における馬墓の位置と出土馬具（小林・澁谷ほか2007より引用・加工して使用）

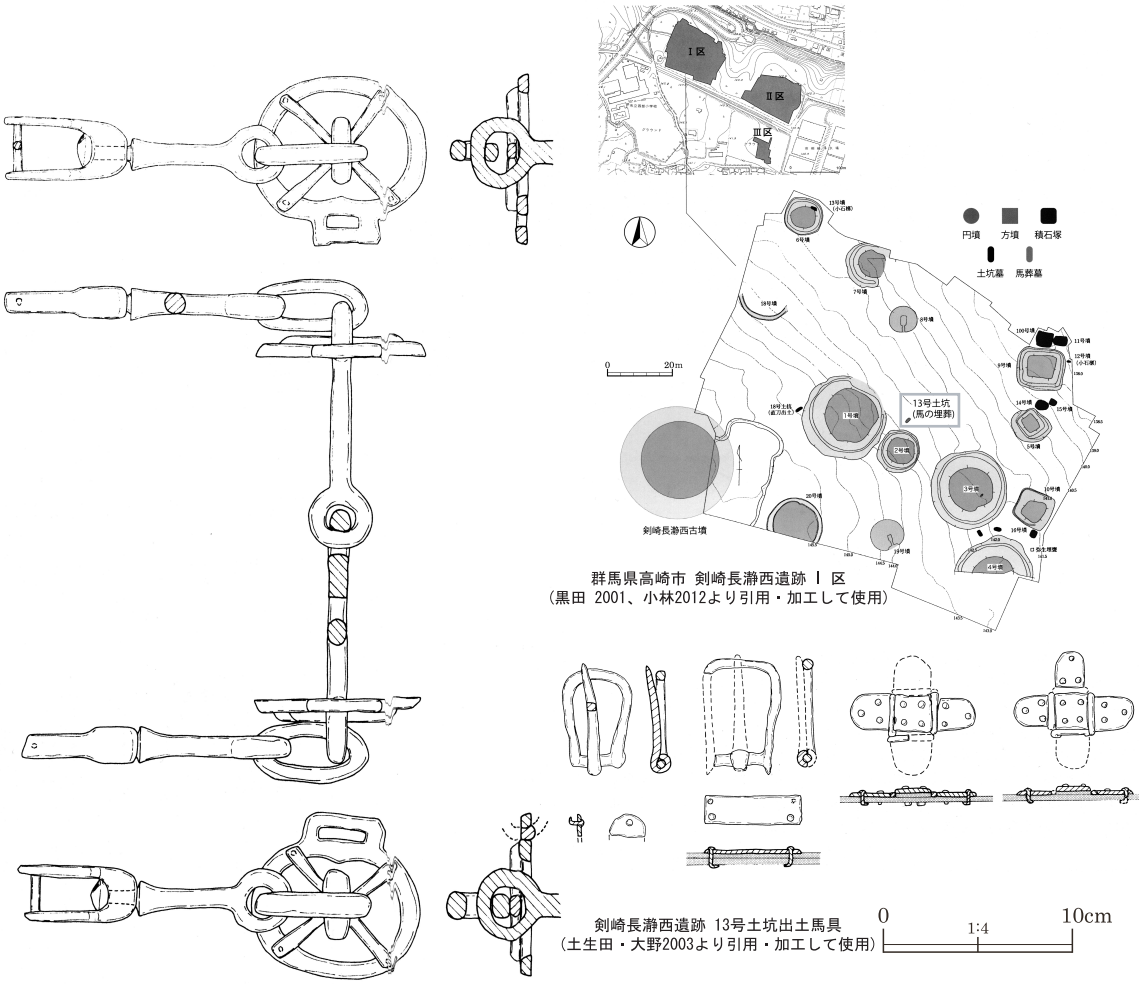
われるようになった背景には、畿内王権による馬匹生産の拡大と渡来系集団の位配、そして畿内から関東へと通ずる「古東山道ルート」の成立がその理由として指摘されている（土生田2006、右島2002・2008、小林・澁谷2007・2012）。すなわち、前方後円墳など大型古墳を多数築くような大きな在地勢力が存在しなかったこと、水田耕作には向かないものの牧に利用できる河岸段丘と天然の柵を形成する中小河川などといった自然地形や、馬を利用した畿内から東国へ至る陸上交通の拠点として適地であったことが要因として考えられる。その一方で、５世紀に入ると急速に古墳規模が縮小していく地域が甲府盆地である。規模についてはともかく、甲府盆地では既に述べたように４世紀段階に遡る可能性がある馬歯・骨の存在から馬匹生産が行われていた可能性があり、５世紀段階になると馬匹生産の主要な担い手が甲府盆地から伊那谷へ変更されたという状況も想定できる（土生田2006）。

ところで、伊那谷では蔀屋北遺跡と比較すると馬の埋葬や馬具以外の遺構や遺物から渡来人の痕跡を示す要素はやや乏しく、後述する西毛や遠江において確認できる積石塚も現在のところ確認されていない。とはいえ、馬の犠牲という日本列島には元来無い風習から、渡来人あるいはその流れにある集団が存在していた可能性が高い。このことから、５世紀段階に馬匹生産を担った集団には古墳を築けるほどの人物がいなかったか、あるいは伊那谷の在来墓制の中で埋葬された

ことが想定される。なお、近年では５世紀段階に造営された「低墳丘墓群」の存在が明らかとなってきた。低墳丘墓は円形か方形で多くは全長20m 以下のものであるが、中には全長30m 前後のものもある。これら低墳丘墓群からは鉄器や土器の出土が確認されているが、豪華な副葬品が出土した事例はほとんど見られない。馬匹生産を直接担った集団については「低墳丘墓群」に葬られた可能性に関しても検討する必要がある。

ｂ．西毛

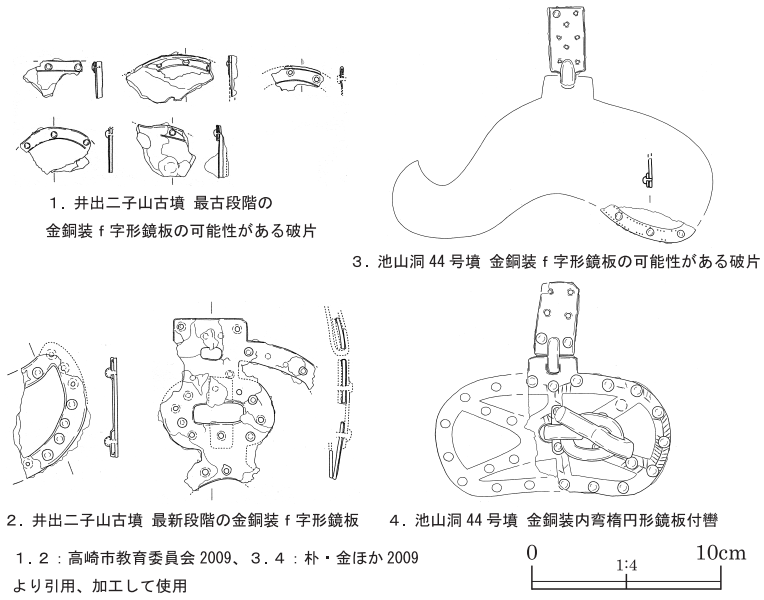
西毛の中でも現在の高崎市や渋川市を中心とした地域では、遅くとも５世紀中頃から後半には馬の痕跡を見ることができる。その代表例である高崎市剣崎長瀞西遺跡では、在来の墓制である円墳群の隙間を縫うように築かれたような小型の積石塚群と馬墓が確認されている。積石塚の１つである10号墳からは金製垂飾付耳飾が出土しており、また、土盛墳である１号墳と２号墳のすぐ近傍に設けられた13号土坑（馬墓）からは日本列島で他に類例が見られない型式の轡が馬の口に装着されたまま埋められたと想定される状態で出土した。この轡は環状鏡板にＸ字形銜留金具



第９図　高崎市剣崎長瀞西遺跡

を備え、遊環を介して銜と引手を連結する構造である。スコップ柄状の引手壺はフレキシブルに回転する構造であり、非常に高い技術で製作されている。これと全く同じものは現在のところ確認できないものの、引手壺の構造を除けば、スコップ柄状引手とX字形銜留金具の特徴から大成洞2号墳例や大成洞42号墳例など、朝鮮半島東南部に系譜を求めることができそうである（松尾2003）。これら墓域周辺の集落遺跡では、5世紀中頃から後半頃のカマド付住居や軟質土器などとともに幼年馬を含む馬歯・骨が確認されている。このことから、馬匹生産が渡来人あるいはその流れにある集団によって行われていたと理解されている（黒田2001、土生田・大野2003、松尾2003、右島2011、若狭2011）。

西毛では5世紀後半になると首長墓クラスの前方後円墳主体部への馬具副葬が認められるようになる。これはほとんどが円墳や低墳丘墓の周溝、あるいは周溝内土坑または単独土坑からの出土である5世紀段階の伊那谷とは対照的である。西毛における5世紀段階の代表的な事例としては高崎市井出二子山古墳例が挙げられる。井出二子山古墳は保渡田古墳群で最初に築かれた墳丘長約108mの前方後円墳である。井出二子山古墳からは4セットの馬具が出土しており、いずれも金銅装f字形鏡板付轡を中心とする馬装であると推定されている。そのうちの最古段階とされるf字形鏡板付轡は鏡板の縁金が金銅版のみで製作されているなど、大伽耶王墓である池山洞44号墳例に近い構造であると想定されており、日本列島で確認されている他の金銅装轡にはほとんど見られない特徴をもつ（中篠2009【1】、【2】）。ただし、管見では井出二子山古墳例のなかで確実にf字形鏡板であると判断できるものは4セット中1セットのみ、最新段階のもののみである。井出二子山古墳例の馬具の多くは破片資料であり、そのうちの最古段階セットの中でf字形鏡板付轡とする根拠は、f字形鏡板の湾曲部分と推定される破片であり、最も特徴的なf字形鏡板特有の先端屈曲部分は他の最古段階の破片中に見当たらず、2番目、3番目に古いとされるセッ



第10図　高崎市井出二子山古墳・慶尚北道高霊郡池山洞44号墳出土例

トの中にも見当たらない。また、池山洞44号墳例においても同様に、ｆ字形鏡板の湾曲部に当たると推定される部分のみで先端屈曲部分は見当たらず、確実にｆ字形鏡板であるとは言えない点には注意が必要である。なお、池山洞44号墳からは３例の轡が出土しており、そのうちの２例が内弯楕円形鏡板付轡である。内弯楕円形の鏡板もｆ字形鏡板に近い彎曲部分を持つ点が注意される。井出二子山古墳例の最新段階セットのｆ字形鏡板は鋲がやや密に打たれ、鏡板は全長15〜18cm 程度に復元できると思われることから、５世紀第３〜４四半期の第４四半期寄りに属すると見られる。井出二子山古墳例の鏡板の形状については不明な部分があるものの、いずれにしても５世紀後半段階に４セットもの金銅装馬具を副葬する古墳は他地域にほとんど見られず、金銅装馬具の保有において他を圧倒していたと言えるだろう。

金銅装馬具ではほかに、高崎市普賢寺東古墳から金銅装ｆ字形鏡板付轡が確認されている。全長約16㎝の鏡板には、鋲頭径約１〜２個分の間隔で鋲が打たれる。金銅版の被せ方は銹化が著しいため不明であるが別被せであると見られる。銜と引手の連結方法については、鏡板の外側で連結する構造であると思われるものの、やはり銹化が著しいため、遊環や固定銜先環などについても不明である。引手と引手壺については銹の量が比較的少なく、兵庫鎖によって連結されていることが明瞭にわかる。普賢寺東古墳例の時期については、銜と引手の連結方法が遊環連結か銜先固定外環かによって異なるが、引手と引手壺の連結に兵庫鎖を採用していることから、おおむね５世紀第３〜４四半期と見て良いであろう。

鉄製馬具について見てみると、先述した剣崎長瀞西遺跡13号土坑例以外に甘楽郡甘楽町西大山遺跡１号墳から出土した鑣轡を挙げることができる。諫早直人氏の分類による１條捩り技法ｂ類によって製作された銜は遊環を介して無捩りの引手と連結する構造であり、５世紀第３〜４四半期頃のものと見て良いだろう。立聞金具が木製鑣に刺さったままの状態であるなど遺存状態が全体に良好で貴重な資料である。５世紀段階には鋳銅製轡も見られ、高崎市姥山古墳例が挙げられる。姥山古墳例は鋳銅製鈴付鑣轡ないし鋳銅製鈴付ｆ字形鏡板付轡で鏡板の外周に７つの鈴がつく。姥山古墳例は鏡板の断面板状に近いものの、平面形は棒状の鑣轡の名残を残しており、完全に板状になった段階の飯田市権現第３号古墳例の前段階に位置すると考えられる。なお、権現第３号古墳例の鏡板表面は縁金や銜通し孔のΦ字形装飾を模しているなど金銅装ｆ字形鏡板付轡を強く意識して製作されているのに対し、姥山古墳例は一方の鏡板外面に珠文を施すのみで、権現第３号古墳例と比較すれば金銅装ｆ字形鏡板付轡への強い意識を窺うことはできない。

西毛以外の地域に目を向けると、東毛では大泉町古海原前１号墳や、太田市沢野村63号墳、太田市下小林車塚古墳から鉄製内弯楕円形鏡板付轡が出土している。３例とも立聞に板状鉤金具を備えることから、概ね５世紀後半から６世紀初頭に属するとみて良いであろう。西毛では現在のところ鉄製馬具に内弯楕円形鏡板付轡が見られないのに対し、東毛から利根川を挟んだ対岸の北武蔵では行田市大稲荷２号墳例、深谷市四十塚古墳例、東松山市諏訪山１号墳例など５世紀後半には内弯楕円形鏡板付轡が複数見られることから、東毛の馬具については北武蔵との関わりについても想定する必要があるであろう。中毛では周溝内に堆積した榛名山二ッ岳の火山灰から６世紀前後の築造と見られる前橋市近戸古墳群４号墳の周溝内から鋳銅製三鈴杏葉などが見られるものの、５世紀段階の馬や馬具に関する資料はほとんど見られない。このように５世紀段階では西

毛と中・東毛とで馬具の様相が異なることが分かる。すなわち、金銅装ｆ字形鏡板付轡＋剣菱形杏葉に対する鑣轡という馬装に階層差がみられる西毛と、鉄製轡や鋳銅製馬具のみで馬装に明瞭な階層差が見られない中・東毛という関係である。このことから、西毛においては井出二子山古墳のような金銅装馬具を副葬する大型前方後円墳被葬者を中心に、西大山１号墳のような鑣轡など鉄製馬具をもつ被葬者が馬匹生産集団を率いていた状況が想定できそうである。ただし、現在までに確認されている５世紀段階の西毛における実用的な馬具の資料数は伊那谷と比較して少なく、馬具から具体的な状況を想定するまでには至らない状況である。今後の資料数の増加を待ちたい。

馬匹生産については、榛名山二ッ岳の火山災害に襲われたことで著名な集落遺跡である渋川市黒井峯遺跡が代表例として挙げられる。黒井峯遺跡からは、馬小屋跡と見られる遺構や、人に引かれて歩く馬の足跡が発見されており、剣崎長瀞西遺跡およびその周辺で開始されたであろう馬匹生産が、６世紀前半には大規模な馬匹生産を行うまでに成長したと理解できる（井上2011、右島2011）。最近では、甲冑を装着したまま榛名山二ツ岳の火山災害によって死亡した成人男性の人骨が発見されたことで大きな注目を浴びた金井東裏遺跡と、南に隣接する金井下新田遺跡において新発見が相次いでいる（よみがえれ古墳人東国文化発信委員会2015）。金井東裏遺跡では馬の足跡や金銅装剣菱形杏葉が、金井下新田遺跡では網代に囲まれた大型竪穴住居跡や馬を引く人物の足跡などが発見されている。最も注目できることは、金井東裏遺跡で発見された甲冑人骨である成人男性人骨とその近くで発見された成人女性人骨の分析結果である。分析結果によると、成人男性の人骨は近畿・北部九州あるいは朝鮮半島南部出身者もしくは二世以降を父母にもつ出自の可能性があり、また、成人女性については近畿よりも東の地域で生育した可能性が高いという。さらに、二人には血縁関係が無いものの幼児期を同じ環境で過ごした可能性があり、その有力な候補地として伊那谷周辺の地域が想定されている（田中2015）。この分析結果は、東日本における馬匹生産の展開を探る上で示唆に富む。すなわち、西毛と伊那谷は人的な部分も含めた相互交流を行っていた可能性があると言える。このことは、５世紀後半段階における「古東山道ルート」の成立とも深く関わる点として大きく注目される（右島2002、2008）。ただし、実用的な使用が想定される馬具については両地域で違いが見られる。特に鉄製轡について見てみると、５世紀段階の伊那谷では鑣轡のほか、内弯楕円形鏡板付轡、鉄製ｆ字形鏡板付轡などバリエーションが見られるのに対し、西毛では現在のところ、５世紀段階では剣崎長瀞西遺跡例のＸ字状銜留金具付環状鏡板付轡と西大山遺跡例の鑣轡の２例のみある。このことは、単純に馬具の絶対量において伊那谷が西毛を上回っていた、ということだけではなく馬具の最終的な利用方法（古墳副葬品、祭祀・儀礼などで使用後に埋納、あるいは再利用など）が異なっていた可能性も加味すべきであろう。次に述べる遠江では５世紀後半段階から現在の袋井市周辺の古墳に鉄製内弯楕円形鏡板付轡の副葬が集中し、鉄製轡において伊那谷とも西毛とも異なる状況が見られる。

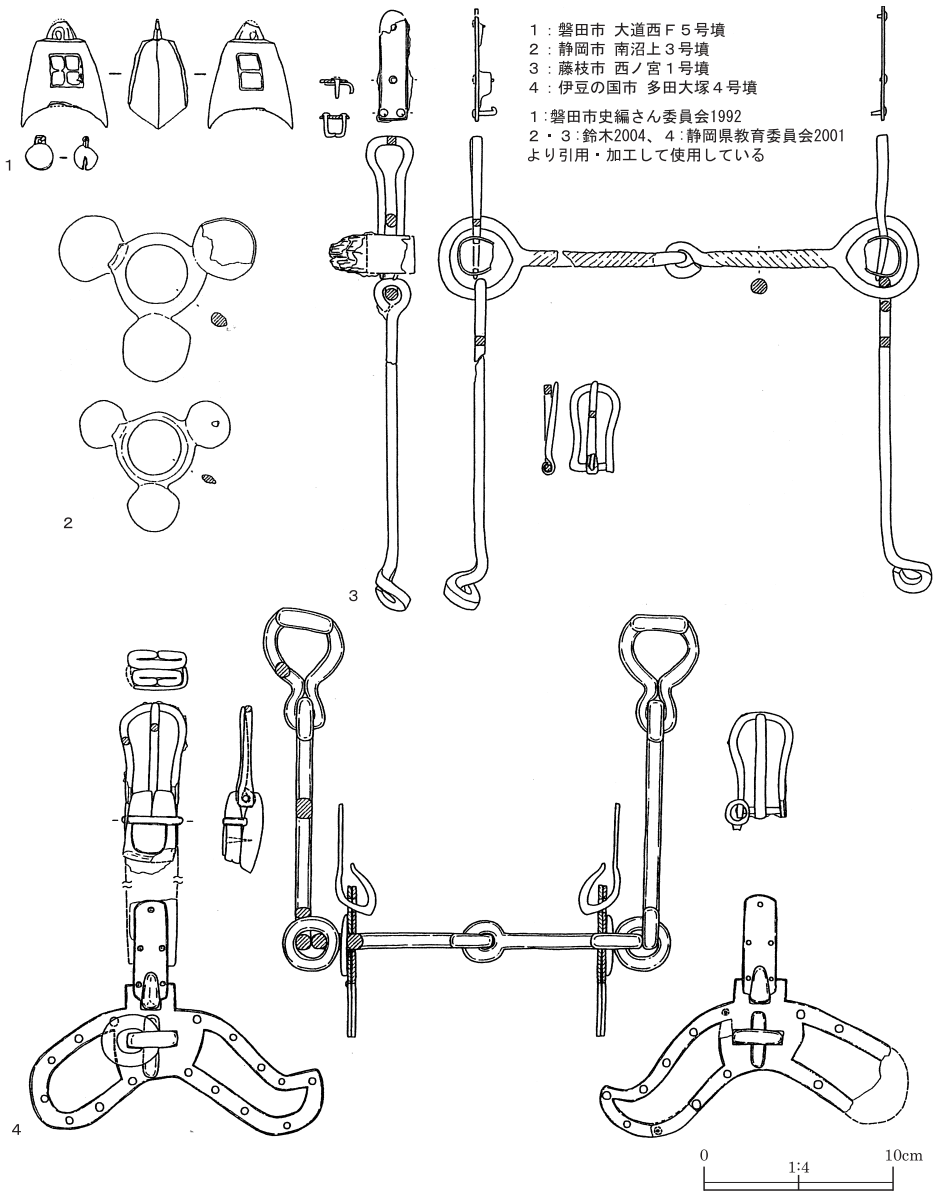
ｃ．遠江

旧国名で言えば西から遠江、駿河、伊豆に分かれる静岡県は、長野県、群馬県、福岡県と並ぶ日本列島における古墳からの馬具出土量が最も多い地域の一つである。遠江では、５世紀後半頃から遠江のなかでも太田川下流域において鉄製内弯楕円形鏡板付轡を中心とした馬具副葬古墳の

集中が見られるようになる。それ以前あるいはほぼ同時期にも遠江から伊豆までの比較的広範囲の古墳において馬具の副葬が確認できる。事例としては、磐田市大道西Ｆ５号墳例である小型鋳銅製馬鐸・鈴、藤枝市西ノ宮１号墳例である多條捩で製作された銜と引手を直接連結する構造の鑣轡、静岡市沼上３号墳例である三環鈴、伊豆の国市多田大塚４号墳例である遊環連結構造の金銅装ｆ字形鏡板付轡などが挙げられる。

磐田市大道西Ｆ５号墳例の小型鋳銅製馬鐸は、立聞を含めた全長約６cm、最大幅約4.5cm で片面には漢字の「田」、もう一面には漢字の「日」に近い形状の文様がある。馬鐸のほかに小型鈴が共伴しており、鐸身内から検出された。大道西Ｆ５号墳例は馬鐸と鈴のみの出土で他の馬具が共伴しないことから、確実に馬具として使用されていたという根拠に欠けるものの、鐸や鈴といった音が鳴るものを馬装の中から優先的に選択して埋納した可能性も視野に入れる必要がある。藤枝市西ノ宮１号墳例は１條捩で製作された銜を引手と直接連結する構造の鑣轡である。銜先環には有機質鑣に立聞金具が刺さったままの状態で遺存しており、面繋との連結に使用されたと見られる鉄製板状金具も遺存しているなど非常に状態が良い資料である。引手は両端ともに折り曲げ成形で環を造り出しており、手綱側はさらに「く」字状に折り曲げて角度をつけている。ほかに、鉄製鉸具が１つのみ確認できることから、面繋の連結に使用したか、あるいは片側だけ吊り下げる有機質製鐙が存在したのであろう。静岡市南沼上３号墳例からは三環鈴が２点出土しており、それぞれで大きさがやや異なる。中心の環への鈴の“食い込み”が比較的少ないことから、５世紀中頃のものとみて良いであろう。伊豆の国市多田大塚４号墳からは遊環連結構造の金銅装ｆ字形鏡板付轡が出土している。鏡板の全長は約15.1cm で、鏡板の縁金には鋲頭径約２～３個分の間隔で鋲が打たれる。なお、縁金に金銅板は無く、鋲のみが金銅装である点が新井原・高岡古墳群４号土壙例と共通することから、日本列島における初期段階の金銅装ｆ字形鏡板付轡の一つと見られる。ただし、鏡板に大型化の傾向が見られることから新井原・高岡古墳群４号土壙例よりも時期は降る。これら４例はいずれも５世紀中頃から後半頃の年代が考えられる。このように、静岡県では騎馬文化導入の最初期段階においては広範囲に馬具が確認できるものの、いずれも点として分布するに留まり、それぞれの地域で継続的に馬具が確認される状況は５世紀段階には見られない。ところで、多田大塚４号墳例は日本列島出土の金銅装ｆ字形鏡板付轡の中でも最古段階の新井原・高岡古墳群4号土壙例に次ぐ古相の事例であり、それまで古墳そのものの築造自体が希薄であった地域に突如として初期段階の金銅装ｆ字形鏡板付轡を副葬する古墳が出現する点には注意を要する。伊豆は古墳からの馬具の出土量が多い静岡県の中でも特に少ない地域で、2006年時点で13例が知られるのみである（東海古墳文化研究会2006）。しかも、そのほとんどが古墳時代後期後半以降の事例であり、古墳時代中期の事例としては多田大塚４号墳例のみが孤立して存在している。多田大塚４号墳は伊豆半島の付け根とも言える位置に立地している。多田大塚４号墳が立地する地域の周辺地形を見ると、北には箱根の山々がそびえ、南には山地が大部分を占める伊豆半島が伸びており、陸上交通の難所であることから海上交通あるいは箱根の坂を往来する際の重要拠点であった可能性がある。

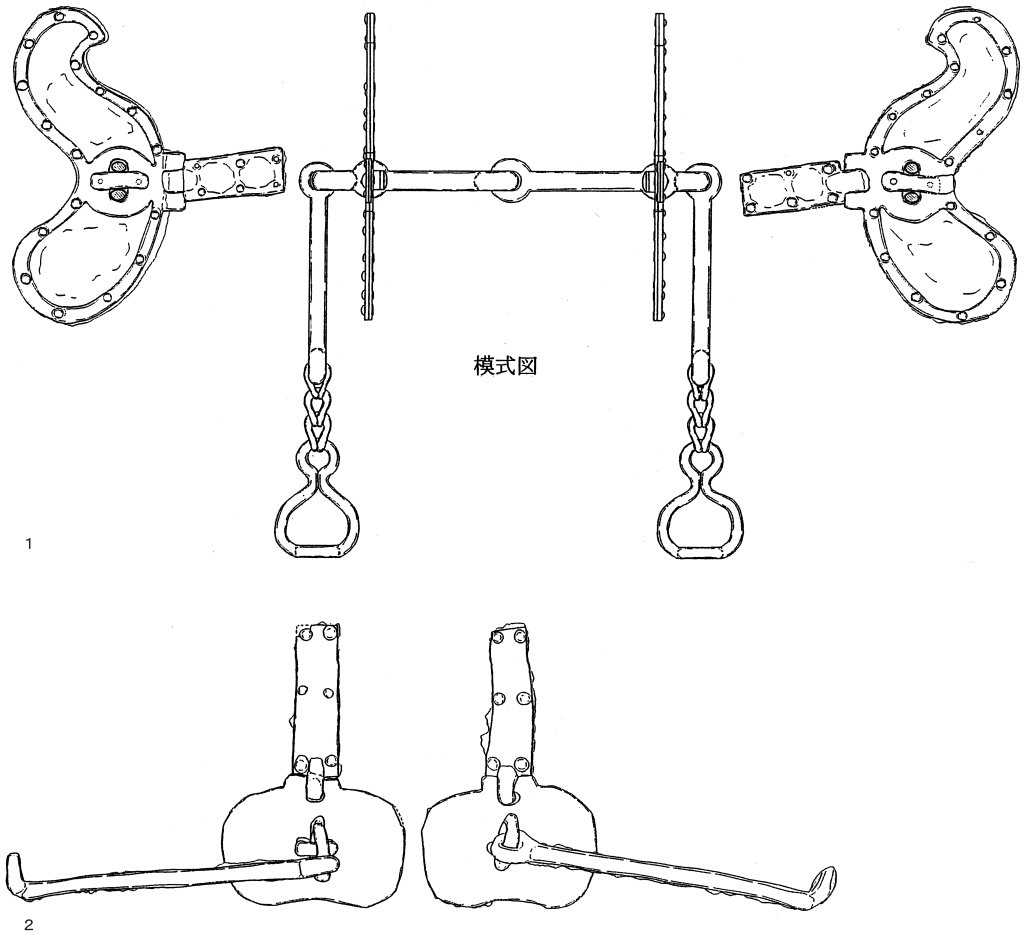
さて、やや時期が降り５世紀後半になると太田川およびその支流域で鉄製内弯楕円形鏡板付轡を中心とした馬具を副葬する古墳の集中が確認できるようになる。その代表的な事例として、袋



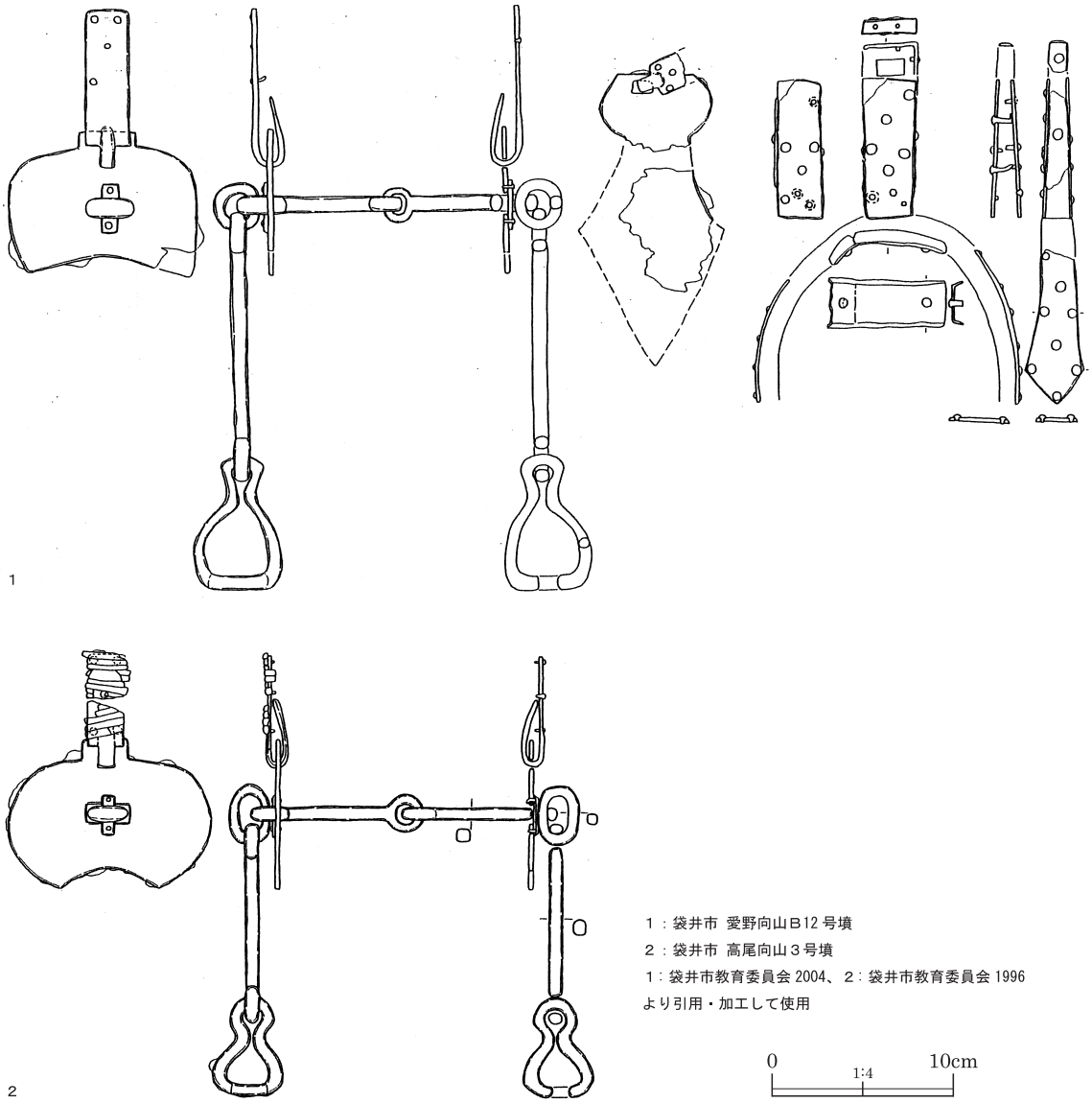
第11図　静岡県における導入初期段階馬具の諸例

井市石ノ形古墳例、同市高尾向山３号墳例、同市愛野向山Ｂ12号墳例が挙げられる。石ノ形古墳からは、鉄製内弯楕円形鏡板付轡のほか、銜先固定外環によって鏡板外側で銜と引手を連結する構造の金銅装ｆ字形鏡板付轡、組合せ式の辻金具が出土しており、他に蝶番金具を備える鋲留短甲を共伴する。石ノ形古墳例のｆ字形鏡板付轡は鏡板に打たれる鋲の間隔が鋲頭径約２～３個分と疎らであり、銜と引手の連結は銜先固定外環を介して行われ、引手と引手壺は兵庫鎖連結である。このような轡の特徴、そして蝶番金具をもつ鋲留短甲を共伴することから、５世紀の第３～４四半期頃のものと考えられる。高尾向山３号墳からは鉄製内弯楕円形鏡板付轡と組合せ式の雲

珠、辻金具などが出土している。鉄製内弯楕円形鏡板付轡と面繋との連結は板状鉤金具によってなされ、組合せ式の辻金具と雲珠を共伴することから5世紀第3～4四半期頃のものと見られる(鈴木2002)。愛野向山B12号墳からは鉄製内弯楕円形鏡板付轡と鉄製剣菱形杏葉のほか、取り付けられる鉄板の側面端部が逆三角形の木芯鉄板張輪鐙、組合せ式の雲珠・辻金具などが出土している。轡と鐙の特徴、そして5世紀後半段階の古墳からの出土事例が多い鉄製剣菱形杏葉から5世紀の第3～4四半期の年代が与えられる。太田川流域では、これら3例以外も含めて5世紀後半から6世紀前半までの間に8基の古墳から鉄製内弯楕円形鏡板付轡の出土が確認されている。日本列島ではほかにも鉄製内弯楕円形鏡板付轡出土古墳が集中する地域があるが、それらに共通する特徴としては、基本的には大型前方後円墳からの出土事例がほとんど見られないという点と、馬具導入期に鑣轡を積極的に採用していない地域であるという傾向が見られる。これらの点については別稿にて検討したい。

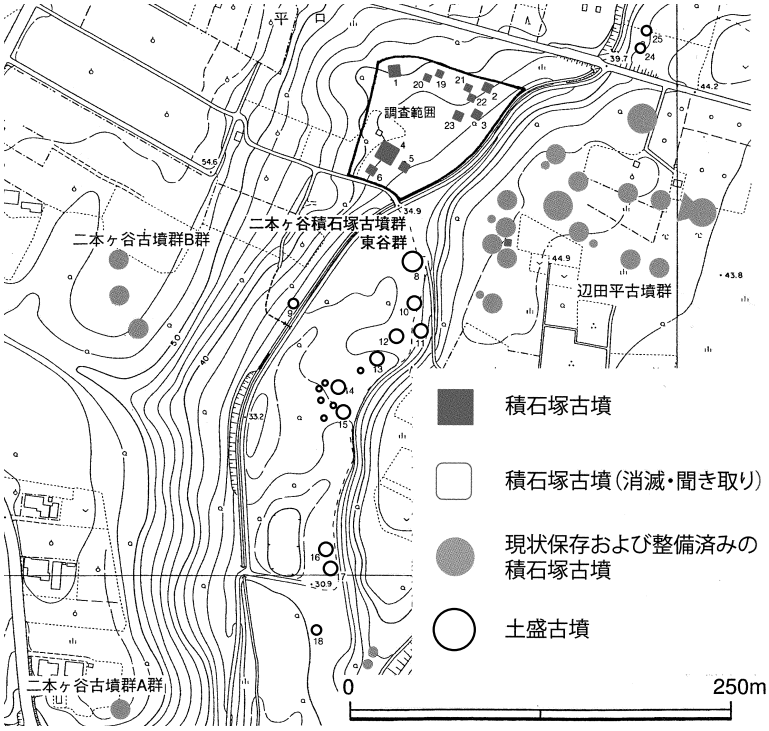


第12図　遠江における導入期段階馬具の諸例 ①(袋井市 石ノ形古墳)



第 13 図　遠江における導入期段階馬具の諸例 ②

太田川流域における鉄製内弯楕円形鏡板付轡を副葬する古墳の周辺では、馬具そのものを除けば近隣に馬の犠牲や積石塚などの濃厚な渡来系要素はあまり見られず、周辺集落の袋井市古新田遺跡から TK208型式併行期の須恵器とともに多孔式甑が出土している程度である。なお、古新田遺跡では総柱建物を含む「コ」字状に配置された建物群から古墳時代中期の豪族居館と推定される遺構が確認されている。ところで、太田川流域の鉄製内弯楕円形鏡板付轡が出土する古墳は基本的には太田川下流域東岸およびその支流域に分布する。一方、同じ太田川下流域でも西岸に位置する磐田市元島遺跡では、古墳時代中期の土師器外面に在地の伝統には無いタタキを施すも



（久野ほか2000、小林2012より引用・加工して使用）

第14図　内野古墳群（二本ヶ谷積石塚群）の分布と立地

のが出土している。このほか、鞴の羽口に転用された土師器高坏や、船財を再利用したと見られる井戸跡や比較的小型の舟型木棺などが出土しており、ある程度の鉄器加工や海上交通との関わりが窺える。また、元島遺跡から太田川を北上した位置にある森町円田丘陵には宇藤蓮台・文殊堂・林古墳群が展開している。宇藤蓮台１号墳ではON46～TK208型式併行期と見られる須恵器甕、文殊堂号４・６号墳では土師器外面にタタキを施した後、ハケやナデによって調整したと見られる土師器甕が出土しており、元島遺跡のタタキのある土師器の事例と類似する。なお文殊堂11号墳からは三角板革綴短甲、林２号墳からは三角板鋲留短甲が出土しており、他に多数の大刀や鉄鏃などの武器類を伴うなど小規模古墳でありながら豊富な武器・武具を入手している。このように、元島遺跡や森町円田丘陵の古墳群に見られるタタキのある土師器や初期須恵器、鉄器加工などの要素から、渡来人あるいはその流れにある集団との関係がおぼろげながら垣間見えそうにも思える。ただし、これらの太田川流域の古墳や集落から出土した資料については、例えばタタキのある土師器甕の器形は在地でよく見られるもので、タタキの要素を除けば在地の土師器とほぼ同様であることから、直接的な渡来系要素とは言えない。森町円田丘陵の古墳群で出土した武器・武具についても、それらを製作・配布していたであろう畿内とのつながりは窺えるとしてもやはり直接的な渡来系要素は見当たらない。これらのことから、太田川およびその支流域には、渡来人そのものではなく、おそらく２世ないしは渡来人の流れをひく人々とこれに関わる集団が存在し、有力勢力と結びつくことで豊富な武器・武具類を入手したと考えたほうが妥当であろう

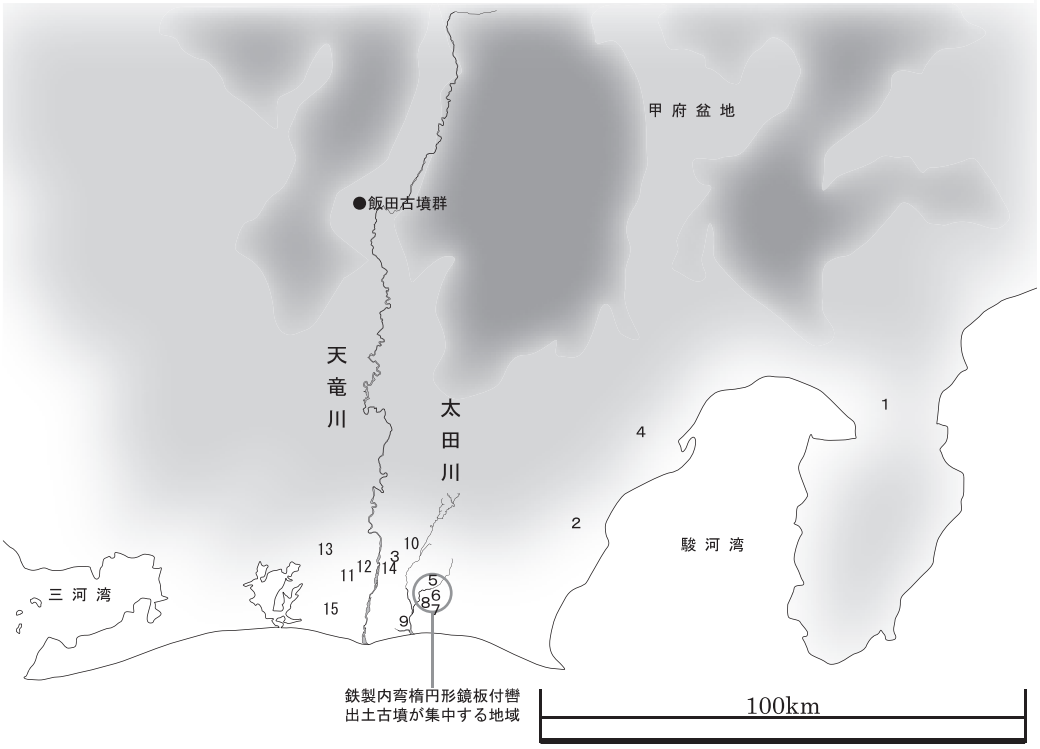
（土生田2012）。

一方、渡来人の痕跡を示すものとしては太田川の西を流れる天竜川流域及び以西に多く見ることができる。浜松市浜北区に位置する二本ヶ谷積石塚群は5世紀後半に本格的な造営を始め、小規模な方形積石塚を主体とする。積石塚は谷底に位置しているのに対し、在地人の墓であろう土盛りの円墳は谷から見上げた場所に位置する。このような立地条件から、決して対等な関係にはなかった2つの集団の存在を読み取ることができる。集落に目を向けると、浜松市山ノ花遺跡や同市須部Ⅱ遺跡などが注目できる。前者からは5世紀前半の初期須恵器が含まれる大溝の堆積土中から多量の土器と土製品、木製品が出土しており、その中から最低でも10個体以上の土馬や多孔式甑が出土している（財団法人浜松市文化協会1998）。後者では、5世紀中頃〜後半にかけての土器が含まれる溝の堆積土から、当時の日本列島では製作が困難であったと考えられる鋳造鉄斧が出土している（佐藤・鈴木2000）。鋳造鉄斧については他に中期前半の古墳である磐田市磐田67号墳から4点、浜松市梶子遺跡から1点、ほかに浜松市天王中野から1点出土しており、東日本における出土事例としては異例の多さと言える。

d．まとめ

ここまで伊那谷、西毛、遠江の騎馬文化導入期の様相について概観してきた。その結果、3地域ともそれぞれ異なる様相を読み取ることができた。それでは、馬具にも地域による違いはあるのだろうか。次に、それぞれの地域における導入期馬具の中でも、事例が豊富で実用的な場面で使用された可能性が高い鉄製轡に絞って検討する。

伊那谷では5世紀前半に遡る可能性がある物見塚古墳例および高岡4号古墳例の鑣轡を最初期段階に導入後、5世紀中頃〜後半には塚原古墳群例である鉄製f字形鏡板付轡や月の木1号古墳例のような鉄製内弯楕円形鏡板付轡といった鉄製板状鏡板付轡が見られるようになる。さらに時期が降り6世紀に入ると、基本的には鉄製板状鏡板付轡に代わって環状鏡板付轡や複環式鏡板付轡が伊那谷における主要な実用轡となる。5・6世紀段階の伊那谷における鉄製実用轡の最大の特徴は、鉄製f字形鏡板付轡や複環式轡が複数確認できることである。これらの轡は特定の地域内でまとまって確認されることが少なく、特に鉄製f字形鏡板付轡については東日本では類例に乏しい一方で、西日本では有力古墳の副葬品となる場合も見られることからその特異性が際立つ。次に、西毛について見てみると、5世紀中頃、あるいは前半まで遡る可能性がある剣崎長瀞西遺跡13号土坑例が西毛における現段階での最古級の鉄製轡である。13号土坑例については、朝鮮半島東南部において比較的近い特徴を持つ例が見られるものの、これとまったく同じ構造の轡は他に見られず、年代の決定については検討の余地が残されている。また、類例の乏しさから同時期にこれと同様のものがどれほどあったのか、本当に一般的な実用轡であったのかどうかという疑問が残る。やや時期が開いて5世紀後半には西大山1号墳に鑣轡が確認できる。西毛において確実に5世紀段階に遡り得る鉄製轡は現在のところこの2例のみであるため、西毛の馬具導入期にどのような轡が一般的であったかなど不明な点は多い。あるいは、5世紀段階の西毛では鉄製実用轡を所持する階層において、伊那谷のように基本的には馬具を特定個人の古墳副葬品にするという意識が薄い側面があった可能性についても考慮する必要があるだろう。また、東毛では5世紀後半の可能性がある古海原前1号墳例のような鉄製内弯楕円形鏡板付轡が複数確認できること



1：多田大塚４号古墳　2：西ノ宮１号墳　3：大道西Ｆ５号墳　4：南沼上３号墳　5：石ノ形古墳　6：愛野向山B12号墳　7：高尾向山３号墳
8：古新田遺跡　9：元島遺跡　10：森町円田丘陵の古墳群　11：二本ヶ谷積石塚群（内野古墳群）12：恒武山ノ花遺跡　13：須部Ⅱ遺跡　14：磐田67号墳
15：梶子遺跡

第15図　遠江における５世紀代の馬具出土古墳および渡来系遺構・遺物出土遺跡の位置

から、西毛においても鉄製内弯楕円形鏡板付轡を使用していた可能性があるものの、現段階ではこれを語るだけの資料数が不足していると言わざるを得ない。

遠江では5世紀後半から6世紀前半にかけて、8例の鉄製内弯楕円形鏡板付轡が太田川下流域東岸およびその支流の古墳に集中して副葬されることから、一貫して同じ系統の轡を採用する騎乗者集団の存在が示唆される。

このように、伊那谷、西毛、遠江の3地域とも5世紀段階の騎馬文化導入期においてはそれぞれ馬具の様相が異なっていたことがわかる。これは土生田純之氏の、渡来人やその流れを組む人々の各地への位配は畿内主導によって行われたとしても、その後の各地での取り扱いはそれぞれの地域に任せたのではないか、という指摘と一致する（土生田2006）。また、5世紀段階では3地域で主として実用的に使用されたと思われる鉄製轡がそれぞれ異なることから、少なくとも実用的な鉄製轡については、完全な畿内主導によって日本列島内、あるいは朝鮮半島の特定地域・特定工房からの一元的入手のみで各地に配布されたとは考えにくいと言える。このことから、多元的な入手ルートの存在についても検討する必要があるだろう。

４．東北地方末期古墳出土馬具に関する予察

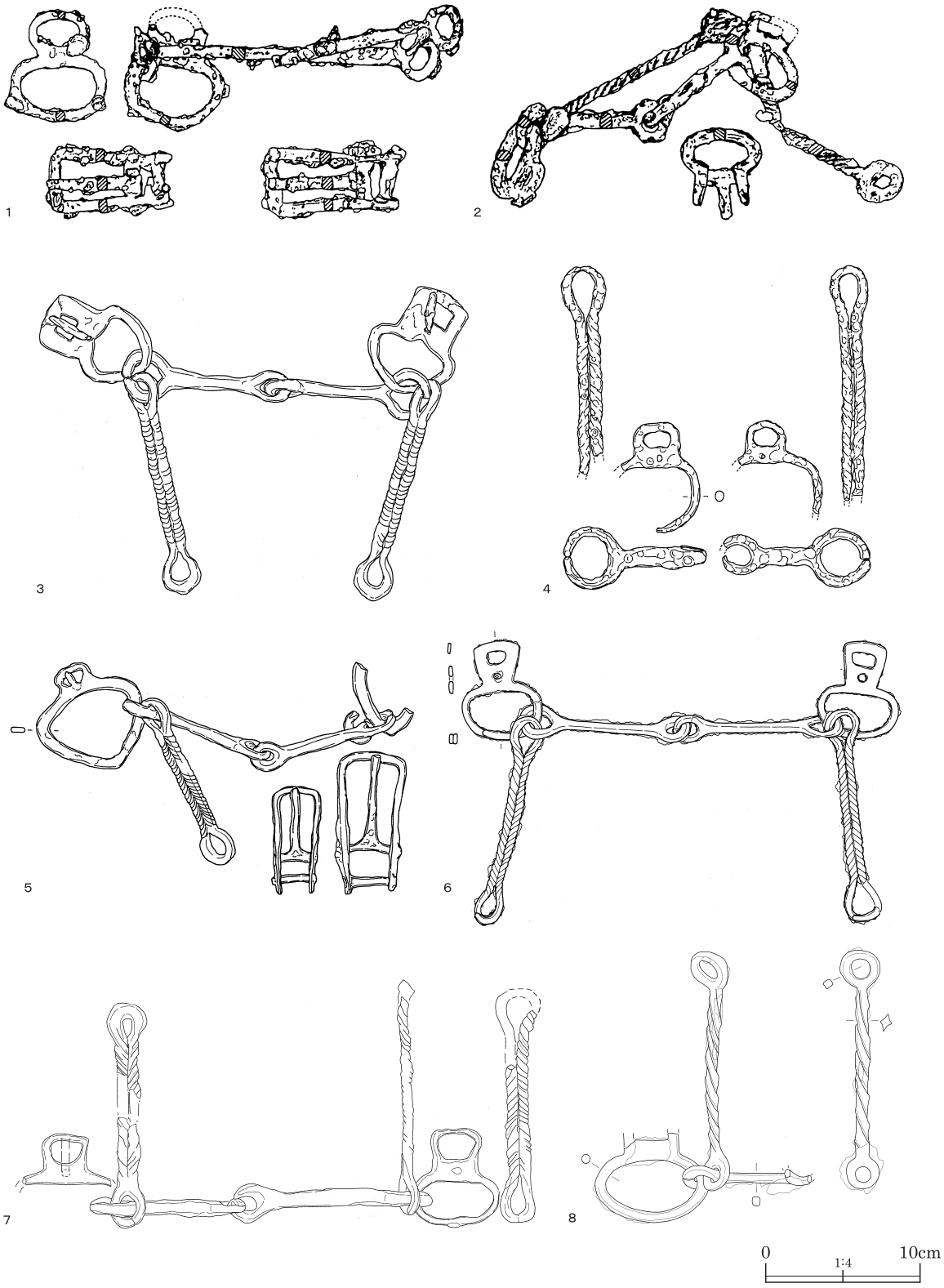
ａ．東北地方における馬の出現

さて、ここまで主に５世紀段階の東日本における馬具導入期の様相について述べてきた。ここからは東北地方末期古墳出土馬具についての概要について述べる。『続日本紀』養老二年八月乙亥条の記述によれば、古代における有数の馬匹生産地の一つであったと推定される東北地方の様相について、末期古墳出土馬具からの検討を試みるものである。今回は概ね７世紀以降に宮城県大崎平野以北に展開する、いわゆる末期古墳からの出土馬具を対象とする。「末期古墳」の定義については研究者によって分かれるところではあるが、いわゆる古墳文化に完全には属さず、続縄文および擦文文化の人々の地域において、概ね７世紀以降に築造された古墳のこととする。今回は、古墳文化とは異なる文化圏に属していた人々がどのような過程を経て馬と馬具を受け入れたか、受け入れた人々はどのような性格の人々であったのかについて、今後検討するための基礎的な材料集めとする。「異なる文化圏から来た未知のモノ」との接触、そして展開と拡大については古墳時代中期に馬と出会った古墳文化圏の人々も経験したことであり、両者を比較検討することによってお互いを補完できるのではないかと思われる。なお、日本海側や北海道に展開する末期古墳については、現在のところ馬具の出土事例が少ないため今回は取り扱わない。今回は特徴的な事例を挙げ、末期古墳出土馬具の概要をまとめ、本格的な検討については別稿を用意する予定である。なお、先に述べた『続日本紀』養老二年八月乙亥条では出羽および渡嶋からの馬のことについて記述されているが、現在までに確認されている末期古墳出土馬具は圧倒的に太平洋側が多い。この点についても今後の課題としたい。

ｂ．末期古墳出土馬具

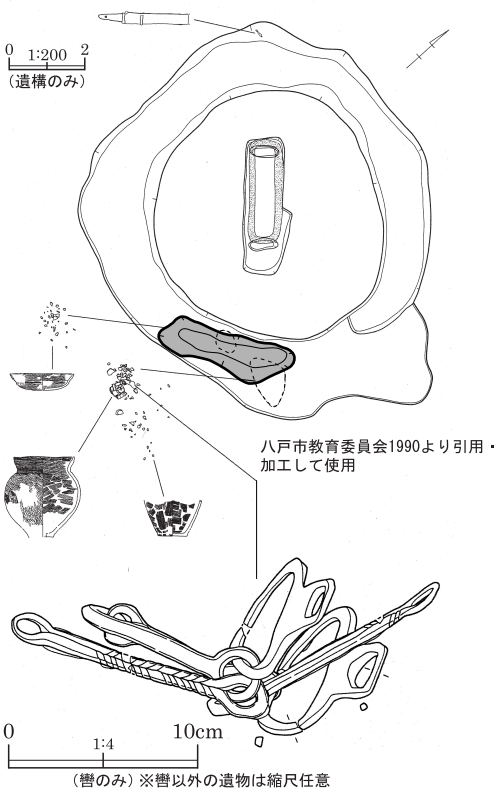
東北地方北部の太平洋側における馬の痕跡で最も古い事例は、岩手県奥州市中半入遺跡における事例である。中半入遺跡は５世紀後半から末頃の築造と見られる日本列島最北の前方後円墳である角塚古墳から北西に約２km の位置に立地する。中半入遺跡では竪穴住居跡から５世紀後半頃と見られる馬歯・骨などが確認されており、古墳時代における直接的な馬そのものの存在を示す資料としては日本列島最北の事例である。５世紀段階に岩手県南部にまで広がった騎馬文化は、古墳時代の間にはそれ以上の本格的な北上をすることはなかったと見られる(4)。ところが、７世紀を前後する頃に末期古墳が築かれ始めると、青森県南部にまで突如として馬具が確認できるようになる。菅見では岩手県と青森県を中心に、複数の末期古墳から鉄製轡を中心とした馬具が出土しており、中には蕨手刀や方頭大刀、金箔ガラスを含む玉類など豊富な副葬品を共伴する事例も見られる。なお、末期古墳以外にも集落跡から鉸具や鐙吊り下げ具などが出土している事例が見られるが、今回は除外し、型式や事例の豊富さから系譜を辿りやすい轡を中心に述べる。

さて、いわゆる末期古墳から出土している事例を確認すると、一部を除けば、その多くが「捩りのある二條線引手を持つ鉸具造付環状鏡板付轡」という東北北部以南ではほとんど確認することができない型式である。鏡板の平面形は楕円形から心葉形のように見えるものがあり、また、断面形は円形や楕円形、中には板状のものまである。個体ごとにバラつきが見られるものの、基



１：岩手県北上市五条丸 47 号墳　２：岩手県北上市五条丸 51 号墳　３：岩手県山田町房の沢Ⅳ遺跡 RT07　４：岩手県山田町房の沢Ⅳ遺跡 RT10
５：岩手県山田町房の沢Ⅳ遺跡 RT21　６：岩手県二戸市諏訪前遺跡 SX30　７：青森県おいらせ町阿光坊 T17 号墳　８：青森県おいらせ町阿光坊 A10 号墳
1・２：伊東，板橋 1963、３～５：大道、佐藤ほか 1998、６：柴田 2008、７・８：小谷地 2007 より引用・加工して使用

第 16 図　末期古墳出土馬具の諸例



第 17 図　青森県八戸市丹後平 33 号墳 遺物出土状況

本的には鉸具造付環状鏡板付轡のものが多いことから、東北北部以南でも一般的に見られる鉸具造付環状鏡板付轡を祖型としたものである可能性が高い。鏡板の平面形に多少の差異があるものの、特徴的な引手が共通している点から、限られた工房で製作されたと見られる。日本列島における捩りのある二條線引手については、4 世紀後半から末頃と見られる行者塚古墳 2 号轡や、5 世紀後半から末頃に属すると見られる千葉県香取市鴇崎天神台 3 号墳例の鉄製内弯楕円形鏡板付轡に見られるほか、いわゆる複環式の轡に見られる程度で、日本列島では一般的な引手ではない。4、5 世紀代の事例と末期古墳の事例を直接比較することはできないが、轡の故地あるいは製作地を考えるうえで示唆的な事例であると言えよう。末期古墳から出土したこれら捩りのある二條線引手をもつ鉸具造付環状鏡板付轡の祖型に当たると思われる事例が、青森県おいらせ町阿光坊 A10号墳例の大型矩形立聞環状鏡板付轡と岩手県北上市五条丸47号墳例の鉸具造付環状鏡板付轡、そして五条丸51号墳例の大型矩形立聞環状鏡板付轡である。これら 3 例は東北北部以南の 6 世紀後半～ 7 世紀前半頃の古墳文化圏においても一般的に見られる型式の轡である。このことから、末期古墳から出土した捩りのある二條線引手をもつ鉸具造付環状鏡板付轡は、古墳文化圏で確認できる轡の型式変化の延長線上にある可能性がある。7 世紀前後の段階で、古墳時代以来のつながりがある岩手県南部はともかく、強いつながりの見られなかった青森県にまで東北北部以南との関係が示唆される轡が広がっている点は注目される。馬具以外に注目できる事例として八戸市丹後平30号墳から出土した三墨獅噛環頭大刀柄頭がある。この柄頭については、日本列島内に他の事例は見られず、朝鮮半島西南部の伏岩里 3 号墳に類例が確認でき注目される。また、末期古墳の周辺には馬墓あるいは馬墓の可能性がある遺構が見られる事例があり、青森県八戸市丹後平古墳群や阿光坊古墳群のほか岩手県二戸市房の沢Ⅳ遺跡の古墳群などでもその可能性がある遺構が見られる。このことから、これらの古墳群に馬具が副葬される頃には、少なくとも古墳被葬者およびその周辺の人物については騎馬文化を受け入れていたであろうことがわかる。また、馬の犠牲行為があったとすれば、これは古墳時代の日本列島には強く定着しなかった風習であることから、渡来人やその系譜をひく人々との関わりについても考える必要がある。ただし、これらの馬墓やその可能性がある遺構からは共伴遺物が出土していないため、確実に時期を特定できる事例が少ない点には注意が必要である。このように、東北北部では末期古墳から

出土した東北北部以南の地域に系譜を求めることができる馬具や新たな風習から多地域間の人々の「交流」を窺うことができる。ここでいう「交流」がどのような性格であったのかについては今後の課題としたい。

5．おわりに

ここまで、日本列島における馬と馬具の導入およびこれらの展開について概観してきた。これらについてまとめると、本格的な騎馬文化導入段階では蔀屋北遺跡を中心に朝鮮半島西南部を中心とした地域との関わりが見られたが、鞍塚古墳例や七観古墳例からは、それ以外の地域を故地とすると見られる馬具も見られることから多元的なルートが想定される。また、鳥羽山洞窟例や吉ノ内1号墳例、大川遺跡 GP96土壙墓例は日本列島における馬具の展開について検討する余地が大きく残されていることを示唆した。蔀屋北遺跡での本格的な馬匹生産開始からほどなく、東日本でも伊那谷・西毛・遠江を中心に馬匹生産が開始されたが、地域ごとに様相が異なっていた。７世紀前後になると、太平洋側では末期古墳の副葬品として現在の青森県にまで馬具が見られるなど急速な展開をしたことがわかる。末期古墳から出土した最も古い馬具の事例は岩手県北上市と青森県おいらせ町の事例であることから、面的な拡がりではなく、かつて東北北部以南でも見られたように点として拠点的に出現したと考えられる。

多くの研究者によって積み重ねられてきた古墳時代の日本列島と朝鮮半島との騎馬文化を介した交流と比較して、古墳文化圏の人々と東北北部やいわゆる北方世界の騎馬文化については、豊富な考古学的研究が行われてきたとは言い難い。騎馬文化を介して日本列島の古墳文化圏の人々と朝鮮半島の人々という異文化間の交流を読み取ることができるのであれば、もう一つの異文化圏である東北北部や北方世界との交流も今後の研究課題として大きく注目していく必要があるであろう。

註

（1）４世紀段階の日本列島には古墳に馬具を副葬する習慣がほとんどなく、馬具についても有機質のものが多数を占めていたのであれば、４世紀段階に本格的な馬匹生産が始まっていた可能性も考えられる。ただしこれを検証することは現実的ではないであろう。

（2）例えば、現代のある家庭に自動車が１台あったとして、その家庭の全員が車の運転をできるかどうかまではわからないことと同様である。ましてや家庭内にその自動車を生産しているメーカーに勤めている人物がいるかどうかなどは全く不明である。これを知るためには、その家庭内の家族構成や個人の経歴、勤め先などといった周辺環境まで詳しく知る必要がある。

（3）蔀屋北遺跡では古墳時代中期集落の形成当初から馬匹生産を行っていたわけではなく、集落形成からある程度の時間を置いてから馬匹生産を行った可能性が指摘されている（藤田2011）。明確な理由は不明であるが、馬匹生産を開始するにあたっての環境整備に時間が必要であったか、蔀屋北遺跡における最初期段階の馬匹生産はその痕跡を確認することが困難なほど小規模であった可能性が想定できる。あるいは渡来人という異質な文化をもった集団が、在来の人々がこれまで見たことのない大型動物を持ちこみ、しかも繁殖させようというわけであるから、これを在来の人々に受け入れさせるための準備期間が必要だったのかもしれない。

（4）馬具としての使用は不明であるが、北海道余市郡余市町大川遺跡 GP96土壙墓からは５世紀段階の可能性が

ある鉄製楕円形板状鏡板１枚が出土しており、馬具だけでみればこちらが最古・最北となる。

参考文献

諫早直人　2009「日本列島における騎馬文化の受容と展開」『古代東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』
諫早直人　2010『海を渡った騎馬文化　馬具からみた古代東北アジア』 風響社
諫早直人　2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』 雄山閣
伊東信雄・板橋　源　1963『五条丸古墳群』岩手県教育委員会
乾　芳宏・熊崎農夫博　2000『大川遺跡における考古学的調査Ⅱ』 北海道余市郡余市町教育委員会
井上昌美　2011「姿なき「白井馬」を探る―白井・吹屋遺跡群の調査―」『第20回特別展 馬とともに生きる～馬具から見た古墳時代～』かみつけの里博物館
岩瀬　透・岡田　賢ほか　2012『蔀屋北遺跡Ⅱ』大阪府教育委員会
磐田市史編さん委員会　1992『磐田市史』資料編１　考古・古代・中世　磐田市
宇部則保　1992『殿見遺跡発掘調査報告書』青森県八戸市教育委員会
江上波夫　1968『騎馬民族国家』
大道篤史・佐藤良和ほか　1998『房の沢Ⅳ遺跡調査報告書』 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
大谷晃二　1996『'96特別展黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
小野山節　1959「馬具と乗馬の風習　半島経営の盛衰」『世界考古学大系』第３巻　平凡社
加古川市教育委員会編　1997『行者塚古墳　発掘調査概報』
加藤理文・川本　忍ほか　1998『元島遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
亀田修一　2003「陸奥の渡来人（予察）」『古墳時代東国における渡来文化の受容と展開』 専修大学文学部
金　斗喆　2004「加耶と倭の馬具」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集　国立歴史民俗博物館
久野正博ほか　2000『内野古墳群』浜北市教育委員会
黒田　晃 2001『剣崎長瀞西遺跡１』高崎市教育委員会
小林孝秀　2012『東日本の古墳と渡来文化―海を越える人とモノ―』松戸市立博物館
小林正春・澁谷恵美子 2000『宮垣外遺跡・高屋遺跡』飯田市教育委員会
小林正春・澁谷恵美子ほか　2007『飯田における古墳の出現と展開』長野県飯田市教育委員会
小林行雄　1951「上代日本における乗馬の風習」『史林』第34巻第３号　史学研究会
小谷地肇　2007『阿光坊古墳群発掘調査報告書』
坂川　進・渡　則子　2002『丹後平古墳群』青森県八戸市教育委員会
佐藤由紀男・鈴木敏則ほか　2000『須部Ⅱ遺跡』浜松市博物館
財団法人浜松市文化協会　1998『山ノ花遺跡』浜松市博物館
静岡県教育委員会　2001『静岡県の前方後円墳』個別報告編
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『森町円田丘陵の古墳群』中日本高速道路株式会社横浜支社
柴田知二　2008『諏訪前遺跡発掘調査報告書 第12次調査』二戸市埋蔵文化財センター
柴田　睦・松井　章　2005『元島遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財センター
澁谷恵美子・小林正春　2000『宮垣外遺跡・高屋遺跡』飯田市教育委員会
澁谷恵美子　2012『飯田古墳群』長野県飯田市教育委員会
下伊那誌編纂委員会　1955『下伊那史』第２巻
白澤　崇ほか　1999『石ノ形古墳』 袋井市教育委員会
申　敬澈・金　宰佑ほか　2003『金海大成洞古墳群Ⅲ』慶星大學校博物館
関　孝一・永峯光一　2000『鳥羽山洞窟の調査―古墳時代葬所の素描と研究―』鳥羽山洞窟調査団
鈴木一有　2002「経ヶ峰１号墳の再検討」『三河考古』第15号

鈴木一有「中ノ郷古墳出土遺物の検討」『三河考古』第17号　三河考古刊行会
高木　晃　2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
高田貫太　1998「垂飾付耳飾をめぐる地域間交渉」『古文化談叢』47　九州古文化研究会
田中良之　2015「古人骨からよみがえる甲を着た古墳人の姿」『よみがえれ古墳人〜金井東裏遺跡から発信された1,500年前のメッセージ〜』
千賀　久　1998「日本出土初期馬具の系譜」『橿原考古学研究所論集』第九　橿原考古学研究所
張　允禎　2008「古代馬具からみた韓半島と日本」ものが語る歴史シリーズ⑮　同成社
東海古墳文化研究会　2006『東海の馬具と飾大刀』
中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1983「安陽孝民屯晋墓発掘報告」『考古』 6 ≪考古≫編集部
中條英樹　2009【１】「井出二子山古墳出土馬具の編年的位置とその意義」『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳史跡整備事業報告』 高崎市教育委員会
中條英樹　2009【２】「馬具から見た井出二子山古墳」『山麓の開発王 井出二子山古墳の世界』かみつけの里博物館
中村潤子　2005「初期馬具」『季刊考古学』第90号　雄山閣
西本豊弘　1996「第３節　塩部遺跡 SY03（３号方形周溝墓）出土のウマ」『塩部遺跡』山梨県教育委員会
西山克己・青木一男ほか 1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人長野県埋蔵文化財センター
朴　天秀・金　在賢ほか 2009『高霊　池山洞44号墳―大伽耶王陵―』慶北大學校博物館・慶北大學校考古人類學科・高霊郡大伽耶博物館
橋口達也編　1979『池の上墳墓群』甘木市教育委員会
八戸市教育委員会　1990『丹後平古墳』
土生田純之　2006「第３章　積石塚古墳と合掌形石室の再検討」『古墳時代の政治と社会』 吉川弘文館
土生田純之　2012「東日本の古墳と渡来文化」『東日本の古墳と渡来文化―海を越える人とモノ―』松戸市立博物館
土生田純之・大野哲二ほか　2003『剣崎長瀞西５・27・35号墳』 専修大学考古学研究室
日高　慎　2003「北海道余市市大川遺跡出土資料の再検討」『考古学に学ぶ（Ⅱ）』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
袋井市教育委員会　1996『高尾向山遺跡Ⅱ』
袋井市教育委員会　2004『愛野向山Ⅱ遺跡』
藤沢　敦　2007「列島の古代史における阿光坊古墳群」『阿光坊古墳群発掘調査報告書』 おいらせ町教育委員会
藤田道子　2011「蔀屋北遺跡の渡来人と牧」『ヒストリア』229号　大阪歴史学会
堀　哲郎　2012「鉄製板状鏡板付轡における銜留金具の諸相―関東における事例を中心に―」『専修考古学』第14号
堀　哲郎　2013「馬具のあり方からみた伊那谷についての一考察〜轡を中心に〜」『古文化談叢』第70集 九州古文化研究会
松井　章・神谷正弘　1994「古代の朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺について」『考古学雑誌』第80巻第１号　日本考古学会
松尾昌彦　2003「13号土坑出土の馬具」『剣崎長瀞西5・27・35号墳』専修大学考古学研究室
右島和夫　2002「古墳時代上野地域における東と西」『群馬県立歴史博物館紀要』第23号 群馬県立歴史博物館
右島和夫　2008「古墳時代における畿内と東国」『研究紀要』13 由良大和古代文化研究協会
右島和夫　2011「出土馬具から見た古墳時代の上毛野」『第20回特別展 馬とともに生きる〜馬具から見た古墳時代〜』かみつけの里博物館

宮崎泰史・山上弘ほか 2010『蔀屋北遺跡Ⅰ』大阪府教育委員会
桃崎祐輔　1993「古墳に伴う牛馬供犠の検討―日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して―」『古文化談叢』第31集
桃崎祐輔　2014「騎馬文化の拡散と農耕文明の融合―江上騎馬民族征服王朝説が描く文化融合モデルとその今日的意義―」東アジアの古代文化を考える会
山上　弘・小林義孝　2004『蔀屋北遺跡発掘調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会
八木光則　1996「馬具と蝦夷―藤沢狄森古墳群出土の壺鐙をとおして―」『岩手史学研究』岩手史学会
よみがえれ古墳人 東国文化発信委員会2015『よみがえれ古墳人～金井東裏遺跡から発信された1,500年前のメッセージ～』
若狭　徹　2011「上毛野における五世紀の渡来人集団」『古墳時代毛野の実像』雄山閣